

2026 年 10 月 15 日

長崎新聞に当社創立 80 周年特集記事が掲載されました

2026 年 9 月 28 日付長崎新聞朝刊にて当社社長および社員インタビュー内容を含む当社創立 80 周年に関する特集記事を掲載いただきましたので、お知らせいたします。

当社は会社基本方針のもと、引き続き ESG（環境・社会・ガバナンス）の取組を推進し、地域社会への貢献と連携強化に向け取り組んでまいります。

次ページに掲載記事を引用しますので、ご覧ください。

（掲載記事についてのご注意）

- 1.出典：ニュース最前線ながさき（長崎新聞. 2026-09-28）
- 2.長崎新聞社に無断で転載することを禁じます。

SSK 基地の街と共に80年

佐世保重工業（佐世保市立神町、SSK）は10月1日で創立80周年を迎える。戦後、旧佐世保海軍工廠の施設を引き継ぎ、基地の街・佐世保と歩み共にしてきた。高度経済成長期には当時世界最大だったタンカー「日章丸」を建造。一方、経営危機や造船業界の低迷など時代のおりも受けてきた。新造船を休止し、現在は修繕と機械製作の両部門に注力。政府は造船業再興を掲げ、SSKの果たす役割にも期待が集まっている。80年の軌跡をたどり、これからの指針を探った。



定年後もSSKを支える嘱託社員野村さん（左）と石田さん（右）
＝佐世保市立神町、SSK（写真は一部加工）

「人がいっぱいだった。今のSSK社員で日章丸を見たことがあるのは私ぐらいだと思う」。1962年に完成した当時世界最大のタンカー「日章丸」。野村寛さん（68）は4歳の頃に見学した思い出を振り返った。SSKの歴史で語り草となっている誇らしい仕事の一つだ。

「佐世保重工業60年史」などによると、SSKは戦後間もない46年10月1日、旧佐世保海軍工廠の施設を借り受け、佐世保船舶工業として設立された。当時の親和銀行頭取らが海軍工廠を再建し、市の復興の柱に据えるよう動いた。船舶の修繕事業などからスタート。朝鮮戦争（50～53年）による

特需で工場は多忙を極めた。52年のサンフランシスコ講和条約発効により、連合国軍総司令部（GHQ）による制約から日本は解放され、新造船の建造が全面的に可能になった。53年に会社創立以来初となる新造船「永邦丸」を運水した。61年に現社名に変更。翌62年に日章丸（載貨重量約13万トン）が完成した。7月に進水式を開き、9月に岸壁で一般公開。この時から野村さんは造船産業に導かれていたのかもしれない。10月には引き渡しが行われ、60年代は載貨重量5万トン超えのタンカーなど大型船を次々と建造。造船大国・日本の一翼を担った。

修繕、機械製作 重要性増す

シヨックにより、経営は打撃を受け、危機を解決しようと政財官が奔走。愛媛県を拠点とする来島とつく（当時）に白羽の矢が立った。後年、「再建王」と称された故・坪内寿夫社長が78年、SSK社長に就任し、経営再建を果たした。しかし愛媛は続き、80年代の円高不況で来島とつくの経営も傾き、91年、SSKは来島とつくとのグループ関係解消。2002年には助成金不正受給疑惑が浮上し、当時の社長が退任後に逮捕された事件もあった。国際的には中国、韓国が造船大国として台頭し、日本の競争力は低下していった。

SSK社長で親会社名村造船所の名村建介社長は53歳で修繕と機械の2事業が改めて重要と説く。背景にあるのは液化天然ガス（LNG）運搬船の国内建造復活を目指す動きなど、造船業への追い風。政府は経済安全保障上の観点から造船を重点投資17分野の一つに位置付けている。名村社長は「世界の主な修繕は中国で行われ、国内で自国の船が修繕できないのは経済安全保障上非常に不安定」と指摘。国内の修繕ヤードのニーズは高まっているという。

SSKのこれまでの歩み

1889年	佐世保鎮守府開庁。軍艦の保守点検・修理、兵器の補給のための造船部・兵器部の設置
97年	造船部が海軍造船廠に
1903年	佐世保海軍工廠開庁
13年	250トンクレーン竣工
46年	旧佐世保海軍工廠の造船施設を借り受け、佐世保船舶工業設立
52年	講和条約発効により新造船の建造を禁止する制約が解除。新造船建造に乗り出す
61年	社名を佐世保重工業に変更
62年	当時世界最大のタンカー「日章丸」を竣工
69年	第3ドック拡張工事完成
72年	赤崎岸壁完成
73年	第4ドック拡張工事完成
78年	来島とつくグループ傘下に
91年	同グループ離脱
2002年	助成金不正受給事件で当時の社長退任
06年	第4ドック右舷に300トンクレーン新設
08年	第4ドック左舷に300トンクレーン新設
14年	名村造船所（大阪市）の完全子会社に
22年	新造船事業休止

船舶エンジンの重要部品であるクランクシャフトの製造も「供給責任を果たす」として本年度、前年度比3割増産する計画だ。SSKは現在約400人体制。野村さんと石田さんは定年後も嘱託で現場の安全チェックや若手育成に尽力。「若い人たちが頑張っている。さらに人が増えてほしい」と願っている。



SSKに林立する多数のクレーンが基地との共生を掲げてきた佐世保の街らしい風景をつくり上げている
＝佐世保市内

名村建介社長インタビュー 強み生かし 地元経済に貢献

名村建介社長にSSKの強みや今後の展望を聞いた。

―80周年を迎える。

事業の継続は取引先、地元の佐世保市、長崎県、従業員のおかげ。深く感謝している。引き継いできた技術や実績が競争力の源泉。一層伸ばす。

―培われてきた強みは。

名村として新造船を建造している。SSKは技術的な知見、能力、人材レベルが高い印象だった。エンジニアの思いが強い会社だ。

―名村造船所グループに加入後、新造船を止めた。

2010年代後半の造船不況の際、事業を見つめ直し、厳しい決断をせざるを得なかった。



「修繕、機械事業で地域に貢献できる企業であり続けたい」と語る名村社長
＝東京都内

SSKは元々修繕を主眼に置いた工場で現代の最新の造船所と新造船で競合するのは難しい。ただ、1社で5本のドックと総延長約1・2kmの岸壁を有するのは希少な存在。修繕ヤードとしての強みは極めて大きく、艦艇修繕、機械の両事業に経営

資源を集中し、収益の安定化を図っている。―両事業の難しさは。新造船は図面を引いて現場でその通りに従って造っていく。修繕は仕様書があるが「何をどういう風に修繕していくか」現場で考えなければならぬ。機

―今後は。最新クレーンの導入による生産性の向上を計画し、「日本一の修繕ヤード」を引き続き目指す。機械部門のクランクシャフト増産方針も本年度は順調。強みを生かし、地元の経済の発展に貢献したい。